

5. 試しにやってみよう（試行）

試行活動の進め方

里地里山調査と課題の整理によって浮かび上がってきた地域全体の課題を検討し、生物多様性の核となる拠点、子どもたちの体験学習の場、保全再生により地域が元気になる場等での保全再生活動を試行的に実施します。

最初の試行場所や活動内容は、多様な主体がそろって参加し、技量や知識の差を意識せず協働作業がはじめられるよう配慮します。そのためには「研修会」として実施するのが効果的です。

保全作業の留意事項

保全作業の指導者は、地域の農林家です。外部の指導者を招く場合でもその土地を一番良く知っている人が季節の変化や台風、豪雨、豪雪等、さまざまな自然現象に対して対応してきた知恵を活かします。地域の人が指導者になることで、地域の積極的な参加を促進する効果もあります。

保全作業では、極力、その場所で入手できる資材を活用します。たとえば、水路の保全作業で竹と間伐材の杭を利用する場合、地元の農林家の方に作業の段取りを組んでもらうと、自ら保有するか、近場で出しやすい場所の地権者に相談して、切りだし場所を選定するなど、地域外の人が調整するのは異なり、地権者の参加と合意が自然と形成されていきます。

保全作業の主体は、地域住民と外部者（都市生活者、自治体職員）で行うケースが一般的ですが、作業回数を重ねる段階で、地域の小中学校や高校、大学、企業へ働きかけることで活動の環が広がります。

ただし、早い段階から計画づくりに参加していない外部者を広く受け入れると、計画に混乱が生じる場合もあるので、新たな外部者の導入には注意が必要です。

保全作業の役割を分担することが大切です。以下のような役割分担が考えられます。

- ・地域農林業者・地権者：里地里山の維持管理には、水管理等の日常的な維持管理が不可欠です。それらは農家等が分担することで、円滑な管理を行うことができます。
- ・ボランティア・NPO等：ボランティアへの期待は、耕作放棄地の復田作業や、除間伐、落ち葉掻きなど、ひとりでも多くの人手が必要な作業です。
- ・研究者：研究者への主な期待は、事前事後のモニタリングです。植生の変化、両生類・は虫類・魚類の変化など、科学的な検証が必要な領域は、研究者が分担し、活動の評価を可能にします。

5-1 研修会

最初の試行となる研修会の場所の選定は、課題や生物多様性、場所（フィールド）の特徴から検討します。地域の農林家が指導者であることを前提に地権者、指導者と計画づくり担当者（コーディネーター）により、研修会の内容を決めていきます。地権者にとっては土地がどのように改変されるか

などの心配もありますので、その意向に配慮します。

希少な生物やその後の生物モニタリングが予想される場合には、事前の生物調査を行います。

水源、水路の管理、ため池、水田、草はらの管理、雑木林や竹林の管理は、それぞれ実施に適した時期、方法、順番などがあります。道具の種類や使い方も異なります。

参加者は、地域の指導者の指導を受けながら技術を獲得し信頼関係を構築します。

5-2 試行活動

多様な主体による研修会を行った上で、必要に応じて、さまざまな試行活動を実施します。課題の整理の中から出てきたアイデアのうち、実行可能なもの、緊急にとりくみたいもの、あるいは長期的に行ってみたいものなどを試行します。すべての主体が参加しなくても、計画づくりに役立つ活動を試行活動として位置づけて実施し、その効果について検証します。

例：小学校の身近な生きもの調べ、竹林整備、落ち葉掻き、外来種駆除活動

5-3 検討と発表

研修会・試行活動の結果について、関わった主体が集まる場を設けてそれぞれが発表し、継続的な方策を検討します。地権者の意向にもよりますが、モデル地域として研修会や試行活動を継続して行うことが望めます。試行活動の継続と結果の共有により、新たな試行地や、計画での活動場所の選定の際、地権者の同意が得られやすくなります。また、関わった主体が、それぞれに発表を行うことで、参加意識や責任感を形成することができる効果もあります。

